学校だより

令和８年10月30日
横浜市立権太坂小学校
11 月号

学校教育目標：友達が好き　自分が好き　たくましく伸びる　権太坂の子

実りの秋　～　失敗を耕し、成長へ　～



校　長　　佐々木　和美





朝夕の冷え込みが増し、木々の葉も色づき始めました。11 月は「実りの秋」を実感する季節です。先日２年生が自分たちで育てたさつまいもを堀りました。友達と一緒に大きなさつまいもを見つけたときには大喜びでした。各学年では自分の考えを伝えたり、友達と学び合ったりする活動を進めています。権小では、子どもたちが「わかった」「できた」という達成感を積み重ねられるような学びを支援しています。

さて、私は、知識や技能はもちろん大切ですが、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには、正解を覚える力だけではなく、自ら考え、挑戦し、失敗しながら成長する力がこれまで以上に求められていると感じます。そのことを考えるとき、アップル社の創業者として知られるスティーブ・ジョブズ氏の話を思い出します。ご存じの通り、ジョブズ氏は iPhone や iPad を生み出し、世界中の人々の生活を変えた人物ですが、家庭では子どもたちのデジタル機器の使用を厳しく制限していたといわれています。食事中はスマートフォンやタブレットを使わせず、家族での会話を大切にし、読書や議論の時間を重視していたそうです。また興味深いのは、ジョブズ氏が子育てにおいて「効率」や「便利さ」だけを追い求めなかったことです。テクノロジーによって何でも簡単に答えが手に入る時代だからこそ、自分で考えたり、悩んだり、時には失敗したりする経験を大切にしたいと思います。

学校生活においても同じことが言えます。私たち大人は子どもが困らないようについ先回りしてしまいます。しかし、本当に子どもたちの力になるのは、失敗を避けることではなく、失敗から学ぶ経験です。授業中の発言やテストで間違えること、友達との関係でうまくいかないこともあるでしょう。係活動やクラブ、委員会活動で思うような成果を出せないこともあります。しかし、その経験こそが「次はどうしたらよいだろう」と考える機会になります。失敗は成長の反対ではなく、成長の入口です。「トラブルはチャンス（トラちゃん）」です。大人がすべての危険や困難を取り除くのではなく、子ども自身が試行錯誤できる環境を創ることが大切です。失敗してもやり直せる、挑戦したこと自体に価値がある、そうした安心感が新たな学びを生み出します。

この「学び方」を考えるうえで、先日報道された文部科学省の教科書に関する議論は大変興味深いものでした。文部科学省は 2030 年度以降の教科書の在り方として、紙とデジタルを組み合わせた「ハイブリッド型教科書」の導入を基本的な方向性として示しています。なかでも注目されているのは、発達段階に応じた活用です。小学校低学年から中学年、概ね４年生以下については、これまでどおり紙の教科書を中心に学ぶことが適しているという考え方が示されています。紙の教科書には、ページをめくりながら学習内容全体を見渡せることや、書き込みながら考えることができること、集中しやすいことなど、多くの利点があります。一方で、高学年や中学校以降は、動画や音声、拡大機能、多様な資料への接続など、デジタルならではの強みも活用していく方向です。つまり「紙かデジタルか」という二者択一ではなく、それぞれの良さを生かしながら学習の質を高めようとしているのです。

私はこの方針に、これからの教育の本質を見る思いがします。大切なのは端末を使うことでも、紙にこだわることでもありません。子どもたちが主体的に考え、他者と対話し、時には失敗しながら学び続ける力を育てることです。本校でも一人一台端末を活用していますが、同時に鉛筆で書く活動や読書活動、友達と顔を合わせて意見を交わす学習も大切にしています。便利な道具を活用しながらも、人と人とのつながりや、自分の頭でじっくり考える時間を失ってはならないと考えています。